

フリーダム・ライターズ

2007(平成19)年7月22日鑑賞<数島シネポップ>

★★★★★



監督・脚本＝リチャード・ラグラヴェネーズ／出演＝ヒラリー・スワンク／イメルダ・スタウトン／パトリック・デンプシー／スコット・グレン／エイプリル・リー・ヘルナンデス／マリオ（UIP 配給／2007年アメリカ映画／123分）

……これは、人種差別がまかり通っているアメリカの高校における熱血女性教師の物語。生徒に日記を書かせるという教育が、これほどまでに劇的な変化を生むとは……？ 公民権運動のシンボルとなった1961年の「フリーダム・ライダーズ」を学習のうで、この映画のタイトルを理解し、その価値をじっくりと考えてみたいもの。地味な映画ながら、2度のオスカーに輝くヒラリー・スワンクの演技力はさすがで、あなたの心に大きな感動を呼ぶはずだ……。

ダブル「エリン」に拍手！

この映画の主人公エリン・グルーウェル（ヒラリー・スワンク）は理想に燃えた国語の女性教師。そして1994年から98年の4年間ロサンゼルス郡ロングビーチにあるウィルソン高校でさまざまな人種の生徒たちを相手に教鞭を執り、「フリーダム・ライターズ」方式を生み出した熱血教師。「フリーダム・ライターズ」とはナニ？

それは、この後ゆっくり紹介していくが、このエリン・グルーウェルという名前を聞いて思い出したのが、ジュリア・ロバーツが第73回アカデミー賞主演女優賞を受賞した『エリン・プロコピッチ』（00年）。これは、六価クロム公害を「発掘」し、原告634名という大訴訟団を結成し、最終的に約350億円という巨額の賠償金（和解金）を勝ち取ったヒロインの姿を描いたもの（『シネマルーム1』36頁参照）。そして、この『フリーダム・ライターズ』を製作したステイシー・シェアは、実は『エリン・プロコピッチ』も製作した人物。

現在のブッシュ政権のキーウーマンとなっているライス国務長官と2008年の大統

領選挙で生まれるかもしれない史上初の女性大統領候補ヒラリー・クリントンの2人はアメリカを代表するスーパーウーマンだが、エリン・ブロコビッチとこのエリン・グルーウェルもすごい女性。私としては、まずこのダブル「エリン」に対して大きな拍手を送りたい。

ヒラリー・スワンクの選択にも拍手！

『ボーイズ・ドント・クライ』（99年）と『ミリオンダラー・ベイビー』（04年）で2度のアカデミー賞主演女優賞を受賞したヒラリー・スワンクは、1974年生まれだから33歳。私は『ボーイズ・ドント・クライ』は観ていないが、近時の『ギフト』（00年）、『マリー・アントワネットの首飾り』（01年）、『インソムニア』（02年）、『ザ・コア』（03年）、『ブラック・ダリア』（06年）は全部観ており、とにかく何でもできる「タフな女優」だという印象が強い。しかしその反面、ハリウッドビューティーの代表であるシャーリーズ・セロンのような華やかな美しさには欠けるところがあり（？）、徹底したプロの性格俳優という感じ……？

2度のオスカー女優ともなれば、いろいろな監督から引く手あまたのはず。しかしパンフレットによると、この映画の脚本を読んでエリン・グルーウェル役に惚れ込んだヒラリー・スワンクは、製作総指揮も買って出たほどの熱意の入れ方でこの作品に取り組んだとのこと。

公開初日に観た劇場の入りは、予想どおり約4分の1の入り。そりゃ他に『西遊記』（07年）、『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』（07年）そして『ダイ・ハード4.0』（07年）等の話題作が他の劇場で公開されているのだから、タイトルだけ見ても何の映画かサッパリわからないこんな地味な映画に観客が集まらないのは当然。しかし、そんな話題先行作ではなく、自分の気に入った作品、自分の演じたい役を自分で選択して納得するまで演じる、そんなヒラリー・スワンクの選択にも拍手を送りたい。

フリーダム・ライターズ vs. フリーダム・ライダーズ

日本人が知っているようで実はその深刻さを全然わかっていないのが、アメリカの黒人差別をはじめとする人種差別問題。この映画の冒頭に登場するロス騒動は、1992年に発生した事件。

他方、1955年にアラバマ州モンゴメリーで、バスの運転手が黒人女性ローザ・パ

ークスに対して白人に席を譲るよう命じたにもかかわらず、彼女がその命令に従わなかったため、人種分離法違反で逮捕されるという事件が発生した。この逮捕に抗議した黒人たちは、キング牧師らを指導者としてバスのボイコット運動を開始した。そして1956年、合衆国連邦最高裁判所がバス車内における人種分離を違憲とする判決を出したことを契機に、南部の州を中心として黒人の反差別運動が盛り上がることに。

この運動が、黒人をはじめとする有色人種がアメリカ合衆国市民（公民）として法律上平等な地位を獲得することを目的としていたため公民権運動と呼ばれるものだ。

そして1961年、人種差別撤廃を求めて黒人と白人の学生たちがワシントン DC から南部へ長距離バスで暴徒に襲われつつも移動したのが、後にフリーダム・ライダーズと呼ばれて、公民権運動のシンボルとなった若者たち。さらに「非暴力直接行動」と「市民的不服従」をスローガンとしたキング牧師らの指導による、1963年8月のワシントン大行進では25万人を集めた一大抗議集会が開催されて、アメリカの黒人運動はピークに達し、1964年ついに「公民権法」の成立に至ったわけだ。そして実は、エリン・グルーウェルの父親スティーブ（スコット・グレン）もこの公民権運動の実践者……。

したがって、この映画のタイトルが、そしてエリン・グルーウェルがウィルソン高校の203教室で始めた、生徒たちに日記を書かせるという教育がフリーダム・ライターズと名付けられたのは、このフリーダム・ライダーズに由来するものなのだ。しかし、このようなフリーダム・ライターズとフリーダム・ライダーズの意味を正確に理解できる日本人は少ないはずだから、気のきいたサブタイトルが必要だし、もっと丁寧な解説が必要なのでは……？

1994～98年、さらにその後は……？

エリン・グルーウェルがウィルソン高校で働いたのは1994年から98年の4年間だけで、彼女はその後ウィルソン高校を離れ、カリフォルニア州立大学で教鞭を執ったとのこと。しかし彼女の「フリーダム・ライターズ」のおかげで、203教室の150人の生徒のほとんどが大学や短大に進学したというのは特筆すべきこと。

他方、「ミスG」のすごいところは、フリーダム・ライターズの哲学をさらに広めべく、203教室の卒業生たちと共にフリーダム・ライターズ基金を設立し、その代表をつとめながら、さまざまな教育改革の実践活動を展開していること。日本では教

育改革のための「教育再生会議」の委員となっていたヤンキー先生こと義家弘介は、参議院選挙が始まると急遽自民党から立候補することに方針を転換した。政治家になって教育改革をするのだという考え方もわからないではないが、これでは「教育再生会議」での活動は一体何だったの？ 単なる売名行為？ と思われても仕方がないのでは……？ なぜ日本では、このミスGのように自分の意思で「オレ流」に自分の理想を展開していく行動的な女性、いや女性に限らず社会活動家が生まれてこないのだろうか……？

ウィルソン高校でのミスGのチャレンジは……？

教室の中での人種対立は、教室を一步外に出た現実社会に厳然と存在する、生きるか死ぬかを含めた人種差別の表れ。今日本で問題とされているようなイジメや格差の何倍、何十倍もの深刻な病巣が、アメリカの人種問題の中に巣くっていることはれっきとした現実。したがって、そこでは拳銃を持ったり、ギャングの組織に属したりするのは生きるための知恵だから、いくら学校でキレイ事を教えても、それはスラム街に住みウィルソン高校に通っている黒人やヒスパニック系そしてアジア系の生徒たちには全く意味のないもの。そして、教える方も教えられる方もそれをわかっているのだから、学校本来の教育機能が果たされないのは当然。

そんな人種差別が当たり前のウィルソン高校の中で、ミスGがチャレンジしたのは「ホロコースト」の悲惨さを生徒たちに教えること。そしてその方法は、第1にホロコースト博物館の見学に生徒たちを連れ出すこと。そして第2に『アンネの日記』を読ませること。

ちょっと出来すぎ……？ でもこれは実話……

いつの時代でも、どこの国でも、またどんな社会やどんな組織でも、既得権益を守ろうとする抵抗勢力や、先例踏襲しか能のない官僚タイプの間人がゴロゴロといるもの。ウィルソン高校のそれが、国語の教科長のキャンベル（イメルダ・スタウトン）で、新しいことを始めようとするエリン・グルーウェルとコトあるごとに対立することに……。

キャンベルの視点は「あの子たちに知的興味を持たせるなんてムリ」とハッキリしている。それが、かつて優秀な白人の生徒が集まる高校だったウィルソン高校が、差

別撤廃を契機として今や三流校・四流校に落ちぶれてしまったウィルソン高校の実態であることはまちがいないところ。しかし現状がそうだからといって、それを変えることはできないの？ それがミスGの問題意識。そして、学校が本を与えないなら自分がバイトをして稼いだ自費で本を買って与えよう、というのがミスG流。そんなミスGには、その次にはアンネを匿ったヒースさんに生徒たちから手紙を出そうなどと次々とアイデアが浮かんでくることに……。

ボクと生徒たち、どっちが大事……？

23歳のエリンはもともと弁護士志望だったが、1992年のロス騒動をテレビで見て、法廷ではなく教室で子供たちを救うべきだと考えて教師になったという変わりモノ……？ まだ23歳の若さだが既に建築家志望の夫スコット（パトリック・デンプシー）と結婚し、一緒に生活している。2人の収入はそれほどでもないはずだが、それなりのアパートに住み、やさしい夫と幸せな生活を送りながら互いの夢に向かって邁進中というところ……。

しかし男にとって、出来のいい（良すぎる？）妻は時として重みになることも……？ だって、あのクリントン大統領ですら、妻ヒラリーのあまりの出来の良さというプレッシャーのため、モニカ・ルインスキー実習生と「不適切な関係」に陥ったりしたことがあるのだから……？

エリンが学校に行く以外にプラを売るバイトやホテルでのバイトを始めたのは、家計のためではなく生徒たちに教材を買うためだから、亭主としては「オイオイ、君がそこまでやる必要があるの……？」と思うのは当然。そんな中、エリンが気づかない間に2人の間に吹きはじめたすきま風は、次第に大きくなっていくことに……。もっとも、スコットが建築家になることを諦めたのは、エリンに原因があるのではなく、スコット自身の心の持ちようにあったのでは……？

女性が社会で生きていくうえでは、男の1人や2人失うことは仕方ないよ、とエリンを慰めてやりたいところだが、エリンの心は今どのように整理されているのだろうか……？

エバの選択は……？

エリンの生徒たちには、黒人をはじめメキシコ系、中国系など多様な人種がおり、

その家庭環境はそれぞれ大きな問題を抱えていた。日記帳に綴られた生徒たちの文章を読めば、いかに過酷な現実の中で生徒たちが生きているのかがよくわかるはずだ。そして映画は、203教室に通ってくるそんな生徒たちの生々しい現実を少しずつ紹介しながら物語を盛り上げていくから、きっとあなたもグイグイと惹きつけられていくはず……。

コンビニでの銃撃事件を目撃したメキシコ系の少女エバ（エイプリル・リー・ヘルナンデス）には、いよいよ裁判所での証言の日が迫っていた。殺人罪で逮捕されたのは、黒人生徒のグラント。しかし、実際にエバが目撃した犯人は黒人ではなく仲間のパコだった。しかし、エバの父親や仲間たちは、「罪を黒人にかぶせればいいんだ。しっかりそう証言するんだ」とエバに対してプレッシャーを……。さて、証言当日、エバはどんな選択を……？

ここでもし、エバが良心に従って本当のことを証言すれば、たちまちメキシコ系の仲間たちから仲間外れにされることはミエミエだが……。

『キネ旬』「REVIEW 2007 Part 2」の高得点に納得！

私は最近いつも『キネマ旬報』の「REVIEW 2007 Part 2」に注目しているが、7月下旬号では今野雄二氏、萩尾瞳氏、塩田時敏氏、三笠加奈子氏の4氏が、『フリーダム・ライターズ』に3点、4点、3点、3点計13点とそろって高得点をつけている。とりわけ、厳しい点数を出すことが多い今野雄二氏が『不完全なふたり』（05年）と並んで3点としているのが印象的……？

私はそれに引きずられたわけではないが、この映画全体の構成力とヒラリー・スワンクの演技力、そしてアンネを匿ったヒース女史が子供たちから「あなたはヒーローだ」と言われたことに対して、「私は当然のことはしただけ」、そして逆に「あなたたちこそがヒーローだ」と言い返す感動的な場面などによって、私の採点は星5つの最高得点に。

2007(平成19)年7月24日記